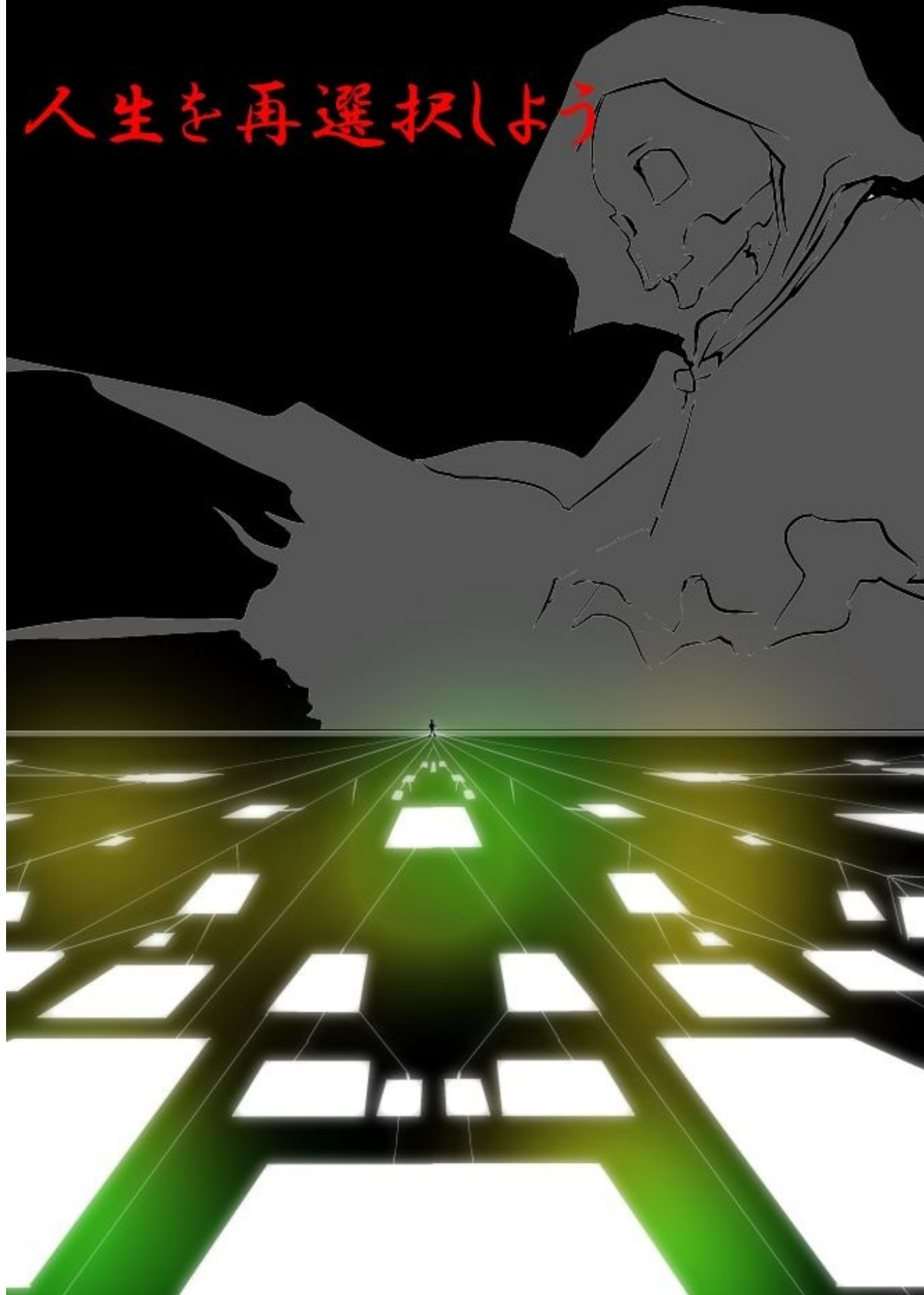


人生を再選択しよう



人生再選択

おやおや死んでしまいましたか。
それでは特別にルート選択コース試してみます？
人生のやり直しができますよ。

俺は突然死んだ。
本当に突然だったけれど、それまで平凡な人生で。
両親がいて、一人っ子。二十六歳、地元企業のサラリーマン。
高校にいったあと、ランクの低い大学に入った。
昔はいじめられてはいたけど、まさか車にはねられて死ぬなんて。
いくら疲れているからって信号無視して車にはねられて即死だと。
結婚してなくて安月給で、いままでも恋人いない。

そして気付いたらここにいたわけだ。
周りが真っ暗、だけどところどころ光っていて、木の枝のように一つの場所から道が生えていた。

ぬっと出てきたのは、ポロ布を纏った骨人間だった。
陽気な声で、俺の肩をたたく。

『これは何かわかりますか？』

そう言って、自分のいる所を中心から広がる枝の様ものをさした。

最初に一個の所に立つ。そこに見えるのは写真らしきもの。

あ、これ見たことある。俺が生まれた時のことじゃない？

そうだ、アルバムで見たことある。この赤子を抱いているのは若かりし頃の母親じゃないか。

そこで眠ってるのは、生まれたころの俺だ。

『そうです、ここからあなたの人生は分岐します』

確かにそこから無数の分岐地点がある。そろそろ行ってみると、いきなり赤子の俺が死んでいる。

うつ伏せになっていて、窒息死かな。

そこで道は止まっている。

『ここでまず別世界の貴方は死んでいます』

なるほど。パラレルワールドって奴だな。

ということは元の場所に戻って、別の方面へ進もう。

あれ、小学校に入る前の写真みたいなものがやはりある。

足元には両親が喧嘩しているぞ。

『こちらはご両親が貴方の学校についてめぐって喧嘩しています』

普通の学校に行ったけれど、そこかいくつかに分かれているので、左へ行ってみる。

両親が離婚届けに印を押している。

さらに道がによきによき生えているが、ここで離婚していたら、別の人生になっちゃうな。

『こちらは結局ご両親は喧嘩の末に離婚したようです。そのあとは別の人生がまた』
もう一つの分岐の先に見えるのは、普通の学校に通う自分と、それを見送る両親の姿。
こっちは今まで俺が歩んできた人生じゃないのかい。

『こちらは今の貴方が進んできたルートの一つですね』

所でやり直しがきくと言っていたからには、この分岐を選んでいけばいいのかな。

『ええ。後で好きな所一つを選らんでください。そこの二十六歳の貴方が死んだ日から始まります』

何だ、そんなことが出来るなら、全く違う人生にしたいな！

じゃあ小学校は違う所に。

有名なエスカレーター式の学校じゃないか。

ここに入るにはかなりの金と努力必要だけど、そこにあるのは、豪華な門をくぐりぬけて、楽しい顔をした小さいころの俺。

『ポイント1をここで確定しますか？』

え、どういうこと？

『ここを選ぶとその先の分岐しか表示されません。前に戻ることはできません』
なにに、じゃあこの学校に入るところから始めよう。

OKOK、ここでいいよ、まずはまた分岐があるな。

後ろをむと、今まであった分岐が消えて、生まれてから小学校に入るまでのルートだけが光っていた。

見る限り順調、両親もいるし、むしろ親父は昇給してるみたいだな。

さて、次の分岐をこうして選べばいいんだな。ゲームみたいだ。

次にルートはまた別れている。一つは、俺がいじめられて泣いている。

ああ、こりゃだめだ。

もう一つは、おお、凄い凄い、小学生低学年で百点取って喜んでる。

もう一つ見てみよう。あれ、俺、何か絵をならわされている？

しかも悪くない、いいな、美術方面か。

死ぬ前は俺、絵はからっきしだけど、絵を描きたいって思ったことは少しあったな。

一枚しか見ることができないのがもどかしいが、泣いてないからいじめられてもいないし、周りに人がいるなかで、本格的に絵を習ってる。

『こちらは、絵を描いている貴方を見て、ご両親が美術教室へ行かせています。ルート2はここでいいですか？』

よしよし、それで行こう。

その瞬間に前の分岐からによきによき生えていたルートが消えた。さて次だ次。

えーと、中学になってまたもめてるな。

中学に入る場所を変えたがっているな。

多分。学校の表を見て、三人で話し込む姿だ。よく見るとかけられている絵は、俺が描いたものみたい。なんだ、凄いうまいじゃないか。

さて、ここからルートは別れる。本格的に美術系の学校に行くか、ここにとどまるか。

他のルートは面倒くさいから、サクサク行こうか。

えーと、中学はこのままか、美術か。悩むな。

一つは、俺、挫折してる。

この学校どこだろう。門には同じ学校の名前だ。

『こちら、貴方が絵を諦めようとしているところです』

うわあ、それは嫌だ。

『あとこちらですが...』

ああ、他のはいいや、とんとん拍子にいい人生送ってやろうぜ。

骨が指差した分を無視すると、美術系の学校に入った自分がある。おーおー、デッサン頑張ってるな、才能の塊なんじゃないのか、さすが俺。

また分岐点がある。その先はちょっと暗くて見えないな。でもここにしようか。

『ルート3決定ですね』

はいはいいいですよ。

さて、次。やはり振り返ると、今までの分岐が消えた。

美術系に特化された学校。

すげえー、石膏デッサンからクロッキーから、毎日絵を描いてるし、周りにも負けてないっぽいな。

一つはとにかく絵を描く姿。

もう一つは...、あれ、学校に行っていない。どういうことだ、布団の中で寝てる。周りには破かれたノートがある。なんじゃこりゃ。

『周りがライバルなのと、きつすぎてどうやら学校をさぼっている様子です』

おっとその先の分岐はまた両親が離婚届け。

こりゃいかん、この分岐なんてやってられっか。もう一つ行こう。

絵を描きながら、隣に可愛い女の子がいる。

二人とも絵描きを目指しているのか、談笑しながら二人でスケッチに出かけているな。

『好きな人が出来たみたいですね』

それでこの雰囲気か、悪くないな。よし、こっち行こう。

『他のは見なくても？』

分岐が分岐産んで、沢山見てたらやってけないからな、サクサク行こう。

『ルート4確定です』

はいはい、次は...、中学半ばか。

んー？何になりたいかなんて書いてある紙がある。

ここは学校か？隣にさっきの子がいる。

俺はその紙に、「ゲームクリエイター」と書いてある。

じゃあ別のはどうかな。やはり同じ場面で、今度は「漫画家」。

漫画家も悪くないが、隣のぞいてる彼女はゲームクリエイターって書いてあるな。他の分岐はいいや。

じゃあゲームクリエイターを目指しますよ、美術だからグラフィックか。

『ルート5確定』

高校はいつてるな。本格的にゲーム系に行きたいみたいだ。

よし、俺、ゲームクリエイター目指すよ。

頑張れ、別のルートの自分！

大学行くか専門行くかで迷ってるのか。

ゲーム行くなら専門？大学？

しかし絵がどんだんうまくなってるな、小さいころの俺、よくやった。

一つの分岐は、有名美術大学。

もう一つは専門。もう一つは...あれ、もう会社に入ってる。

でも事務員やってるぞ。

『こちらは絵の方向を諦めて、無難に会社に入りました』

何だ、諦めたのか俺。じゃあ...

と、もう一つ分岐を見てみると、さっきの女の子と動物園でデートしている自分だ。スケッチブック持って、二人とも手をつないでいる。はは一ん、青春謳歌してるな。

『こちら、美術大学にお二人入りまして、お付き合いしています』

おーおー、彼女が出来て夢追ってるとは素晴らしい。

ここまで挫折なし!!すげえな俺。

『ルートを確定します』

次だ次。大学で彼女と喧嘩しているな。

こりゃいかん、別れるかも。

別の方向をいつてみると、プロポーズしている。

結婚早いな。

『夢を諦めて、彼女と結婚していますね』

何だよそれ、諦めんなー。よし、こっちだ。

そちらは、二人一緒に入る会社を選択しているみたいだ。

こんな有名校で画力ありゃいけるだろう。

彼女は、あ、彼女はアクセサリ関係か。

でも見た感じ悪くはないが、俺はやはりゲームクリエイター。

会社の名前は、これは有名なあの会社！一流の！

俺あの会社のゲーム大好きなんだよなあ。

『ルートを確定しますか？』

あー、待って、ちゃんと会社行けるの？彼女は？

『彼女とは会社はわかれますが、まだ付き合っています。無事入社します』

それでいこう。

『ルート確定』

しかし人生変わっちゃうな。

おっと、そろそろこら辺でゲーム会社に入って、なんだ？

何かやってるな、俺には分からないけどグラフィック任されて喜んでるな。

もう一つは落ち込んでるみたいだ。

『こちらは...』

あー。いいや、落ち込んでなくていいや。こっちこっち。

グラフィック任されて喜んでるこっちな。

『ルート確定します』

次。

今度は有名プロジェクトのメイン絵師だと！

すげっ、キャラデザ任されちゃうんだ。

俺、それでびっくりしてる。

あ、俺が入社したことで絵師も変わるのか。俺は有名人ってわけだ。

他を見るまでもなくこっちだ。

年齢このとき幾つだろう。

『二十五歳になります』

お、そろそろだな、俺がここくるまでに死んだ時間は。

季節は冬か。死んだのは夏だから、このままいけば最高の人生じゃね。

冬に行ってみると、彼女と会ってチョコレート貰っている。バレンタインだな。

っ...と、待て、ここから先がないじゃないか。

『貴方が死んだ時間以降は表示されません』

なある程、そのあとはその人生でやって行けてることか。

よし、これで決まり、彼女がいて一流会社は行って人生順調、これで決まり!!

『確定しましたね貴方のこれからの時間をお過ごしください』

周りが真っ暗になった。

俺は、それまでのことを覚えていた。

別の人生でつまらなく車にはねられて死んだ時間。丁度、このころだ。疲れてへ口へ口で...でもこっちの世界だと、生きてるな。

確かキャラデザ任された...ん、思い出すことが出来るぞ、ここに入る時に面接で緊張して、彼女と喧嘩もなくやっていけて、両親健在。

最高の人生だな。それで今は有名ゲームの絵師、か。

気がつくとも布団の中。

あれ、おかしいな。体が重い。

心が重い。

時間は死んだ後をすぎて、朝になっている。

朝日まぶしいな。会社行かないとな。

...ん？

何か思い出すぞ。

俺、プレッシャーで押しつぶされそうだ。

そんな馬鹿な、人生で挫折なんて味合わない俺がそんなはず...。

それから俺は一カ月頑張った。けど、リメイクばかり出された。

毎日毎日残業して、帰ってくるのは日付が変わる。

彼女との電話するのも面倒くさくなってきた。

怒られてばかり。

もう何もかもが嫌になってきた。

なんでこうなった？あれ、何してんだ。

疲れて、もうなにもする気がない。そろそろ電車が来る。

足が 勝手に 通り過ぎようとする 電車に 向かって いた

はげしい電車の風と音共に、目の前が真っ赤に染まった。

『おやおやあなたはまたここに来てしまいましたか』

また真っ黒な所に来た。

なんでだよ、最高の人生選んだはずなのに!!

自殺してしまった俺は、もう一度人生やり直さなきゃな。

しかし何で死んだんだ？何がつらかったのだろう。

俺って、簡単に自殺するような奴じゃないけど。

『挫折をすることも彼女と喧嘩することもなかったと』

そうそう、俺の人生、順調そのもの。

彼女と喧嘩なんて一度もなく楽しいはずだし、すべて順調。

の、はずだった。

...挫折？

したことない...はずだった。

『挫折しないで成長する人はいますか？落ち込んだあなたを慰めてくれる同僚はいましたか？彼女と喧嘩一度もしないでやっていける人生はありますか？』

それまでの分岐点にちらほらあった。

落ち込む俺、挫折を味わった俺、彼女と喧嘩。

あれ、あの時分岐が更にあった。

木の枝みたいに沢山あった。

で、俺はどうだ？

確か一人でプライド高くて相談する相手いなかった。落ち込んだことがないから強い奴に見られていて。

忙しいから、彼女とメールのやり取りすら面倒だった。

心労の果てに俺は、自然と電車に飛び込んだ。

『貴方は、彼女から別れをげられて、味わったことない挫折を初めて味わい、弱い心の貴方は自殺を選択していました』

何だ、じゃあもう一度行こう。

簡単簡単、人生やり直し。

骨のいた先を見ると、そこには何もなかった。

よくよく見れば最初に死んだ後の分岐点には何も存在しなかった。

『挫折もせず、喧嘩もせず、辛い思いもせず、簡単に一流会社に入社した温室育ちを選んでしまったあなたは簡単に死んでしまいました。プレッシャーに耐えきれませんでした。絵以外の趣味を見つけられませんでした』

だから次いこうよ。次、別ルート。

『残念ながら、ルート再選択は一度だけ。では次の人生は、生まれ変わってからまた自ら選択してください』

目の前が真っ暗になった。

最高の人生を歩んだはずの俺はほぼ同じ日に、もう一度死んでいた。

別の人生を選択していたらどうなったかな。彼女と喧嘩して、落ち込んでいた俺を選択していたら、どうなったかな。

挫折して俺を選択して、もしそのあと...また頑張ろうってやってたら、少しは強くなってたのかな...

『お次の人生では頑張ってくださいね』

終

あとがき

人生再選択ができたら面白いとは思いますが、そうしたら選択するのは、順調に何もかもが進んでいるように見える自分。

と、言うわけで、今回は名前もないこの人に犠牲になってもらいました。

因みに骨の人は、来世はいかが、現世はいかがに出てくるつり橋の方の案内人です。

人生を再選択しよう

<http://p.booklog.jp/book/45123>

著者：香吾悠理(エビル)

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yuuri15/profile>

<http://yuuri15.huu.cc/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/45123>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/45123>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.